異変夢

小林守城

二十一世紀の初頭
偶然にしてはその数字に
不思議な当たりがある

アメリカ　二〇〇一・九・一一
マンハッタン世界貿易センタービル崩壊
日本　二〇一一・三・一一
東北関東大震災と福島第一原発事故

それぞれの地獄はやがて必然となり
それぞれは時代の分水嶺となる
大地の揺らぎは気まぐれで
凄絶な破壊はつねに想定外だ
日はよそ事のように水仙の花を咲かせ
人は合理的な愚か者として災いとなる

I

あー容易(たやすく)く言葉を失ってはならぬ
生きるものの悲しみあれば
苦しみを分かち合える　言葉よ

いまこそ人々の沈黙の呻きに
対生する言葉を繋(つな)げよ

意識の底深くに凝る闇となる前に
詩人よ　いま生きものの先端で語れ

累々とした屍　有縁の生の
行方も知れぬ春暁の夢のなかで

Ⅱ

わたしはその日
朽ちた大樹の上をひたすら
列なして動く　蟻の夢を見た

生まれいずる白い卵を咥(くわ)え
何処へ行くのか　生物の教室から

牛飼う人は　野に放つため
命の避難所を後にしたまま

牛と人の生きる眼はふかく
その時互いに等しくなり

津波や放射能の齎(もたら)すものは
その時すべてに等しかった

Ⅲ

やがて痩せた母たちが里山に
萌黄色に戻ってくる

山菜を背負い家畜と連れ立ち
なつかしい竈(かまど)に火をつけて

セシュームもプルトニュームも
知らなかった鄙(ひな)の道を帰る夢

子どもらがまつわってくる

Ⅳ

夕焼けの雲に届くスカイツリー
固まった水母（くらげ）のように
林立する高層ビル群に向けて

わたしは女だったかな

いつか見た夢の中だったか
尻を捲（まく）って勢いよく放尿した

遠い記憶の底の懐かしいその音
不断の暮らしを連れて来るように

それはたしか北原白秋の詩
落葉松の林に向けたものだった